

## ケネディ政権とボリビア MNR 革命政権

——進歩のための同盟の「モデル」としてのボリビア, 1961-63年(上)——

上 村 直 樹

### 1. はじめに

米国は、別稿で検討したように、アイゼンハワー政権下、1952年以来ボリビアで大規模な改革政策を推進してきたMNR（ボリビア革命運動：Movimiento Nacionalista Revolucionario）革命政権に対する緊急経済援助を1953年に決断し、次第に同政権への恒常的経済支援へと向かう〔上村2015a; 上村2015b; 上村2016a〕。そして、その後の米国歴代政権は、1964年にMNR政権が軍事クーデタによって倒れるまで大規模な経済援助を続ける。本稿は、米国による革命政権への援助という、20世紀のアメリカ外交において特異ともいえる政策の背景と意味を解明するための一環として、ケネディ政権の政策に焦点を当て、別稿で既に検討したアイゼンハワー政権の対ボリビア政策との連続性や違いについても触れながら、ケネディ政権の対ボリビア政策の意味について考察する。

ケネディは、アイゼンハワー政権のラテンアメリカ軽視がキューバ革命とキューバによるソ連接近という重大な結果をもたらしたとして、同政権のラテンアメリカ政策を批判し、新たに「進歩のための同盟」によって大規模かつ包括的な対ラテンアメリカ援助政策を開始した。その中でケネディは、ボリビアのビクトル・パス大統領指導下のMNR革命政権をラテンアメリカにおける進歩的改革政権の先駆ととらえ、自らの「進歩のための同盟」による改革と援助のための一つのモデルとしてボリビア革命を再評価し、アイゼンハワー政権末期に減少傾向にあった対ボリビア援助を大幅に拡大して、パス政権の新たなテコ入れを図ったのである。

但し、こうしたケネディ自身や政権関係者そして当初の研究によって強調されたアイゼンハワー政権との違いや断絶を強調する議論に対して、近年の研究ではアイゼンハワー政権末期のラテンアメリカ政策とケネディ政権の「進歩のための同盟」政策との一定の連続性が指摘されることが多くなっている〔Rabe 1999: 11-14; Taffet 2007: 11-19〕<sup>1)</sup>。本稿では、こうしたアイゼンハワー政権から

1) こうした違いを強調する代表的議論として、〔シュレジンガー 1966 上: 202; Gordon 1963〕を参照。またアイゼンハワー政権の対韓援助政策を検討した李鍾元によれば、1950年代末に向けて同政権が、「一方においては経済開発問題の重要性を認めながらも、軍事援助縮小には躊躇するという曖昧な姿勢で終始し、結局1960年代の新しい政権の登場を迎えるまで援助政策の画期的な転換」が進まなかったとしている〔李 1996: 220〕。こうした他地域との比較からすれば、ラテンアメリカに対しては、アイゼンハワー政権下でケネディ政権における援助政策の「画期的な転換」への準備が進んでいたとも言えよう。

ケネディ政権への連続性と断絶をめぐる議論も含め、ボリビア政策がケネディ政権のラテンアメリカ政策全体の中でどのように位置付けられ、どのような意味を持つかについて歴史展開を追いながら検討する。

## 2. アイゼンハワー政権からケネディ政権へ：キューバ革命と対ソ接近の衝撃

前稿でも検討したように、アイゼンハワー政権は、MNR 政権が政治的には一定の安定を達成する一方、大規模な援助にもかかわらずボリビア経済に一向に改善が見られない中で、1956 年から革命政権に対して急激なインフレの鎮静化を主眼とした本格的な経済安定化政策の実施を迫り、革命ボリビアの国家主導型経済の大幅な転換と自由主義的な経済改革（現在の用語法からすれば、「新自由主義」的・「市場原理主義」的政策）の導入を強く求めるようになる [上村 2016b]。

こうしたアイゼンハワー政権の政策はボリビア革命との関係で 3 つの重要な結果をもたらしていた。一つは MNR 政権内部および国内政治全体での左右対立の激化であり、経済安定化政策への国内の反発、特に革命政権の主要な支持基盤である組織労働からの反対が強まる中で、安定化政策の実施受け入れを決定したエルナン・シレス大統領以下の MNR 政府・党指導部と、党内で組織労働の利益を代表するファン・レチンらとの対立が深まり、国内政治全体としてもシレス政権と労働左派との対立へと発展していき、革命政権の基盤の不安定化につながっていく。2 番目の結果として、こうした事態に対応するために、シレスは、アイゼンハワー政権の強い意向も受けて、革命直後に全面的に改組縮小した国軍へのテコ入れを開始し、米国の援助によって軍の治安維持機能の強化を図った。この再建強化された軍が、後に米国にとってボリビアにおける秩序維持の新たな担い手となり、1964 年の軍事クーデタへと向かうのである。3 番目の結果は、米国の経済援助の減少である。米側は経済安定化政策の徹底的な実施と自由化・民営化政策の推進によって、ボリビア経済の自立的な発展の道筋をつけようとしたが、ボリビア経済の基盤である一方、組織労働の拠点でもある錫を中心とする国有化鉱山において安定化政策の実施は困難を極め、「余剰労働者」解雇やボリビア鉱山公社 (Corporación Minero de Bolivia : COMIBOL) 購買部 (pulperias) への多額の補助金廃止等による鉱山経営の「効率化」をめぐる対立が続く。そして、米国の大規模援助にもかかわらずボリビアの自立的な経済発展の展望が見えない中で、国有化鉱山の抜本的「改革」を促す圧力としての意味も含めて、1950 年代末に向けてアイゼンハワー政権は、対ボリビア援助の削減を図ったのである [Thorn 1970: 194]。この 3 番目の点に関して、前稿でも指摘したように、ラテンアメリカ援助政策全体としては、アイゼンハワー政権は、政権初期の「援助ではなく貿易」政策における「市場原理主義」から大きく転換し、公的開発援助も含めてラテンアメリカ諸国への経済援助を確実に拡大していく中で、革命ボリビアに対しては、むしろ国家主導型経済から市場経済への転換が推進され、援助そのものも減少させていったのである [上村 2016b: 23-30]。

こうした中で、キューバ革命の成功とその後の対ソ接近は、ボリビア革命にとって天祐となった。そもそもソ連は、フルシチョフ新指導部の下で 1956 年の共産党大会以来、アジア・アフリカの新興独立諸国や途上国全般に対する経済援助攻勢を強めており、特に 1958 年から 1962 年のキューバ・ミサイル危機での手痛い後退までの時期は、「大いなる期待に満ちて」第三世界への関与を拡大していったのである [Westad 2007: 159]<sup>2)</sup>。その間、ソ連にとって、アメリカの裏庭として援助に

2) ソ連の冷戦政策および第三世界政策・ラテンアメリカ政策に関しては、[Blasier 1983; Clawson 1986; Korbonski and

よる政治的効果は薄いと考えてきたラテンアメリカの重点は低かったが、1958年のニクソン副大統領の南米親善訪問の際のベネズエラ等での激しい反米デモ、更にキューバ革命の成功とその後の社会主義化、対ソ接近によって、にわかにラテンアメリカでのソ連の勢力拡大の絶好の機会が訪れた。フルシチョフ以下のソ連指導部はこの機をとらえて、外交関係の樹立や経済援助の申し出など、対ラテンアメリカ外交を積極化させる一方、1960年以降はキューバ革命政権との連携を強め、ラテンアメリカでの反米主義の高まりや変革への動きを利用して更なる革命の実現やキューバによる「革命の輸出」にも手を貸すようになる〔Brands 2010: 31-34, 40; Blasier 1983: 100-103〕<sup>3)</sup>。米国にとっては、キューバ革命政権による大規模な改革とそれに伴う米国資産の国有化等の政策は重大な懸念材料であったが、更にキューバ革命の指導者フィデル・カストロとその盟友チェ・ゲバラによる「革命の輸出」は、カリブ海周辺諸国からラテンアメリカ全体へと政治的不安定化をもたらすとして重大な関心の的となった<sup>4)</sup>。更にはソ連と提携し、社会主義化したキューバ革命の成功は、ラテンアメリカ、ひいては第三世界全体におけるソ連型の発展モデルの優位性を示すものとなりうるとして深刻な懸念が持たれた<sup>5)</sup>。これは、1950年代後半以降、冷戦が第三世界へと広く拡大しただけでなく、その内容も軍事的な対立から開発途上地域における発展モデルをめぐる争いとしての性格を強めてきたことからなおさらであった。実際、ソ連指導者らは、1960年代初めにかけて、「キューバ・モデル」への期待を高め、関与を深めていくのである〔Taffet 2007: 12; Brands 2010: 32; Westad 2007: 170-180〕。これは後で見ると、米側がケネディ政権の下で、自らの自由主義的・資本主義的な改革と発展のショーケースとして、MNR革命政権による「ボリビア・モデル」へのテコ入れを強めるのと好対照をなすのである。

こうした状況の中で、ソ連はボリビア革命政権に対する働きかけも強め、フルシチョフは、1960年10月の国連演説で、MNR政権が米国に対して強く求め続けてきた自前の錫精錬施設の建設援助を提案し、更に1億5千万ドルに上る開発援助を申し出るなど、ボリビア国内に大きな反響を巻き起こしていた〔Despatch (以下 Desp) 212 from La Paz (以下 LP) to Department of State (以下 DS): "Weeka No. 42," October 18, 1960, U.S. National Archives, Records of the Department of State, RG56 (以下 NA) 724.00(W)/10-1860; Editorial Note, U.S. Department of State, *Foreign Relations of*

Fukuyama 1987; Haslam 2011〕を参照。

3) 但し、ソ連側は当初からキューバの「冒険主義」には警戒感を抱いていた。しかし、キューバ革命の進展と対キューバ関係の緊密化の中で、ラテンアメリカの反政府武力闘争へのKGBによる支援策が1961年の政治局で承認されるなど、フルシチョフは、カストロによる「革命の輸出」に対する支援へと向かう。ブランズによれば、こうした決断の重要な背景の一つが中ソ対立の深刻化であり、第三世界での社会主義勢力の主導権を毛沢東の中国に奪われないためにも、新たに誕生した社会主義キューバへのテコ入れを強化していった。しかし、その後のキューバ危機の経験や対米関係の改善から1960年代半ばには、ソ連は、こうしたラテンアメリカでの革命支援には再び慎重になり、キューバとの軋轢も目立つようになる〔Brands 2010: 40-41〕。

4) 米・キューバ関係に関しては、〔Smith 1960; Welch 1985; Smith 1987; Morley 1987; Benjamin 1990; Patterson 1994〕を参照。カストロおよびキューバ革命、キューバ外交に関しては、〔Szulc 1986; Horowitz 1988〕を参照。キューバ・ソ連関係に関しては、〔Gonzalez 1987; Packenham 1988; Blasier 1993〕を参照。

5) 実際、ケネディは、ソ連がラテンアメリカにおいて革命キューバを社会主義的発展の「ショーケース」とすることに強い危機感を持っており、ソ連によるキューバ1国への支援と異なって、米国はキューバ以外の2億人のラテンアメリカ諸国民のすべてを支援する必要があると、ソ連に比べて不利な立場にあることに懸念を示していたとされる〔Rabe 1999: 22〕。

*the United States* (以下 *FRUS*), 1958-60, V, 654]。またソ連はラテンアメリカとの議員交流も進め、1960年12月には南米訪問中のソ連議員使節が、同年夏のボリビア議員団のソ連訪問の返礼としてボリビアも訪問していた。更にソ連は外交関係の樹立も迫るなどボリビアへの働きかけを強め、政権末期を迎えていたアイゼンハワー政権は効果的な対応を迫られた [Desp 346 from LP to DS: "Weeka No. 3," January 19, 1960, NA724.00(W)/1/1960]。

こうした1950年代末からのボリビアを含むラテンアメリカに対するソ連の攻勢に対するアイゼンハワー政権の対応は、本稿の冒頭で述べたケネディ政権のラテンアメリカ政策との連続性と断絶という点からすれば、その両方の要素を含んでいたと言える。アイゼンハワー政権は、1950年代末の事態の急速な展開に対して反共主義的観点から危機感を募らせ、ラテンアメリカが既に米国にとってもはや安定的な「裏庭」ではなくなったとして、既に触れたように「市場原理主義的」援助政策の急速な転換を図り、ラテンアメリカの開発促進のためのイニシアチブを次々と打ち出していったのである。即ち1958年にはラテンアメリカが従来強く求めてきた商品協定と米州開発銀行 (Inter-American Development Bank: IDB) への反対という従来の立場を大きく転換させてそれぞれの導入と設立を認め、更に市場経済原理から外れたソフトローンによる開発借款を大幅に拡大するに至るとともに、政権末期の1960年には従来の市場重視の立場からは最も乖離したともいえる「社会的進歩信託基金 (Social Progress Trust Fund)」の設立を認めている。特に同基金は、1950年代を通じて経済援助政策に関する保守派とリベラル派の主要な対立点の一つであった公的資金に関して、ラテンアメリカ側の根強い要請に応える形でその積極的活用に踏み切るとともに、支援の対象も単なる経済発展ではなく、経済社会開発という極めてリベラルな内容を持つものであった<sup>6)</sup>。更に同基金設立の発表は、1960年8月のボゴタ米州会議に合わせて行われ、同会議の場でも

6) 米国における「自由主義 (liberalism)」および「保守」と「リベラル」という用語法に関しては、米国独特の歴史の変遷と概念上の一定の混乱がある。特にニューディール以降のアメリカ政治の文脈においては、「リベラル」という言葉が、アファーマティブ・アクションや福祉政策の充実を国家に対して求める人々やそうした考え方や政策を指すようになり、国家に対する個人の政治的自由の擁護や国家の介入に反対して経済競争の自由を求める伝統的な自由主義とは、かなり異質なものとなっている。17, 18世紀の欧米における市民革命時代の本来の自由主義の内容としては、トニー・スミスによれば、「個人の自由と財産権の擁護、慣習ではなく理性への訴えかけ、法の支配と被治者の同意の下での政府」という点が中心となる [Smith 1994: 14]。佐々木毅は、後者の古典的な自由主義をアメリカにおける「保守主義」と規定し、前者のニューディール以降の新たな自由主義を「リベラリズム」として、ヨーロッパ大陸の政治的伝統でいえば「社会民主主義」に近いと整理している [佐々木 1993: 11-15]。こうしたアメリカの自由主義の対外政策における意味としては、アイゼンハワー・ケネディ両政権の対外援助政策の対比という点からすれば、海外における民主主義的政治体制や自由主義の諸価値や諸制度の実現を目指す広義のいわば「リベラル」な「自由主義」が考えられる一方で、シドニー・ファインやアラン・ドーリーが指摘するような政府の経済過程への介入に反対し、自由競争や自由貿易に重点をおきたいわば19世紀的なレッセ・フェール型の自由主義も重要な役割を果たしてきた [Fine 1964: 9-13; Dawely 1991: 1-2]。後者のいわば経済的な「自由主義」は、第二次世界大戦後の開発途上地域に対する政策に特に顕著に見られ、開発途上国の経済的ナショナリズムに基づく各種の保護主義的政策や制度などに対して、経済の開放と自由化を求める政策となって表われている [Krasner 1985: 3-13; Packenham 1973: 3-8]。この点は、本稿の文脈からすれば、アイゼンハワー政権当初の「援助ではなく貿易」政策がまさにこれに該当し、ボリビアに関しては、当初からこうした側面が反共主義とともに常にあったが、特に1956年以降の経済安定化政策に典型的かつ全面的に表れている。こうした理論的側面の考察に関しては、[上村 2000: 102-104] を参照。



ラテンアメリカの経済成長の促進に加え、社会開発や社会改革の推進を唱える「ボゴタ憲章」の成立に同意し、その後のケネディ政権による「進歩のための同盟」へと直接つながる政策革新を行っていたのである [Kaufman 1982: 164; Rabe 1988: 109-15, 142-43]。こうした一連の政策は、アイゼンハワー政権内の圧倒的な「市場経済至上主義」に抗して、開発援助や社会改革への支援の必要性を政権内で力説してきたミルトン・アイゼンハワーやジョン・キャボット前米州担当国務次官補らの政権指導者らが自らの努力が実ったものとして「米州関係における発想の大転換」と見なしただけでなく、「進歩のための同盟」に関する最近のタフエットの研究でも「ラテンアメリカ開発問題における劇的なアプローチの変化」とも評価されている。しかし、タフエットも指摘するように、こうした変化は「アイゼンハワー政権の実際の財政支出に影響を与えるには遅すぎた」と言える [Taffet 2010: 19; Rabe 1988: 143]。

更にラテンアメリカ援助に関してアイゼンハワー政権からケネディ政権への移行をめぐる連続性と断絶性の議論の中で留意すべきは、こうしたアイゼンハワー政権の政策転換は、政権としての明確な長期的ビジョンに基づいて行われたというより、1958年以降の事態の急展開の中でさみだれ式に行われていったという点である。これは、次に見るようにケネディ政権の「進歩のための同盟」が「近代化論」という新たな強力な概念的枠組みの中で最初から極めて明確なビジョンに基づく包括的な政策の体系として進められたのとは大きく異なっていた。更にケネディ政権は、「進歩のための同盟」という力強いリベラルなシンボルを高く掲げ、これも次に検討するように、一連の具体的政策の迅速な実施によってそのための政策的裏付けも十分に行って、政権発足直後のピッグス湾事件による手痛いダメージから速やかに回復できた。ピッグス湾事件は、ラテンアメリカ諸国と開発のための対等な新たなパートナーシップを構築するというケネディ政権発足当初の主張を裏切るものであり、武力介入による支配という旧来の米国イメージを呼び起こすものであった。「進歩のための同盟」の開始は、そうしたイメージを払拭させただけでなく、更にかつてのフランクリン・ローズヴェルト政権の「善隣外交」に匹敵する幅広い民衆レベルの支持をラテンアメリカ全体にわたってもたらしたのである。これは、1954年のグアテマラ革命介入の印象が強く残り、長らくラテンアメリカ諸国の意に反して「貿易と投資」の効用を説き続けたアイゼンハワー政権とはシンボル操作において大きな違いがあった<sup>7)</sup>。実際には、後で検討するように、そうしたリベラルなイメージとは裏腹に、ケネディ政権による新政策の開始は、アイゼンハワー政権による政策転換と同様の強烈な反共主義から行われており、ケネディ政権が「進歩のための同盟」政策の一環として強力に推進することになる国内治安対策等の軍事的対応についても、後でボリビアの事例に即して検討するように、アイゼンハワー政権が開始した政策を継承し、「グリーベレー（陸軍特殊部隊）」の設立などによってより包括的な形で発展させ、「反乱鎮圧戦略（counter-insurgency strategy）」としてベトナム等でより大規模な形で適用していくものであり、その連続性がここでも顕著である<sup>8)</sup>。ケネディ政権は、こうしたイメージ面での成功に加え、アイゼンハワー政権における政策転換の官僚機構内での主導者であったダグラス・ディロン経済問題担当国務次官やトマス・マン経済担当国務次官補をそれぞれ財務長官および米州担当国務次官補として加えながら前政権末期の政策革新を取り込み、更にボストンを中心とする強力なブレーン集団を新たに加えて、アイゼンハワー政権の政

7) 善隣外交とグアテマラ革命介入をめぐるラテンアメリカ側の反応の違いについては、[Dozer 1959; Wood 1961; Wood 1985] を参照。

8) ベトナムの事例に関して、詳しくは [松岡 2013] を参照。

策を全面的に拡大・深化させる形で、「進歩のための同盟」政策を開始したと言えよう。

実際、これも後で検討するように、アイゼンハワー政権によって設立されたばかりの IBD は、ボリビアに関しても既に 1960 年から米国政府の主導下に西ドイツ政府も巻き込んで、ボリビアの国有化鉱山の根本的な改革支援のためのトライアングラー計画の交渉を開始していたが、同計画はケネディ政権成立後、「進歩のための同盟」の発表直後に、その一環として 1961 年 8 月に発表されるのである [Thorn 1970: 229-30; Siekmeier 2011: 92-93]。このようにソ連の第三世界全体での外交攻勢とキューバ革命の衝撃は、米国の指導層に強い危機感を与え、アイゼンハワー政権の第三世界全体およびラテンアメリカに対する援助政策の積極化を促すとともに、次のケネディ新政権に「進歩のための同盟」というラテンアメリカに対する大胆な政策イニシアチブを生み出させ、更に革命ボリビアに対しても新たな論理の下での大幅な援助拡大をもたらすことになるのである。まさに 1950 年代末から 60 年代初めにかけての時期は、米ソともに冷戦の主要な戦場の一つとしてラテンアメリカを重視する中で、新たに登場するケネディ政権は、ボリビア革命に「進歩のための同盟」政策の「先行例」として注目し、ボリビアで新たに発足したパス政権にとっては米国援助の「復活」と経済発展路線の徹底的追求への重要な契機となるのである。

### 3. パス政権の登場

米国でのケネディ政権発足に半年先んじて、ボリビアでは革命政権の第 2 代大統領シレスに代って、革命政権の初代大統領パスが 1960 年 6 月の大統領選挙で当選し、8 月に新たに 4 年の任期で再び大統領に就任していた。パスは、シレス政権期の 4 年間、ロンドンで駐英大使としてボリビア国内の政治的対立からは距離を置いていた。国内で経済安定化政策の実施をめぐる左右対立が深まり、シレス政権への批判が続く中で、パスの政権復帰を求める声が高まっていた。パスは、自らの最大の目的であるボリビアの経済的發展の実現を目指すため 2 期目を目指し、新たな権力基盤としてインディオ農民層と軍の支持を固めたうえで、レチンを副大統領候補として労働左派を懐柔して選挙戦に臨んだ [Whitehead 2003: 34; Dunerley 1984, 98-99]。しかし、こうした動きに対しては MNR 党内右派が強く反発し、その中でも特に MNR 結党時からの中心的指導者の一人であり、パス、シレスに続いて次期大統領職は自らに来るべきと考えていたワルテル・ゲバラ元外相は、他の右派指導者らとともに党を割って新たに「真正革命党 PRA (Partido Revolucionario Autentico)」を結党して対抗馬として大統領選挙に出馬した<sup>9)</sup>。結果は、組織労働と農民層からの強い支持を得たパスの圧勝であったが、それでもゲバラの PRA と極右政党であるボリビア・ファランヘ党 (FSB) とを合わせた得票数は、政府側による様々な選挙妨害等があった中で全体の 3 分の 1 近くに上るなど、右派への支持や政府への批判の声はあなどれないものがあつた [Dunkerley 1984: 98-103]。

パスは政権に就くと直ちに経済發展の促進に向けた体制の整備に取りかかった。1960 年 8 月に発足した第二次パス政権は、副大統領に左派指導者レチンが就任したものの、それ以外は第一次政権時の組織労働との「共同統治 (co-gobierno)」とはうって変わって、労働勢力を排除し、経済發展路線一色となる。閣僚や政府機関の長には革命の第二世代ともいえるギジェルモ・ベドレガルらの若いテクノクラートが多く抜擢された。労働左派は、レチン副大統領の下で、経済安定化政策実施によって後退した革命を再活性化させ、「革命の新たな段階」に進むことを期待したが、パスの

9) 当初の党名は、MNRA (MNR-Autentico : 真正 MNR)。

ねらいは左派封じ込めであった〔Malloy 1970: 290; Dunkerley 1984: 104; Field 2014: 6, 19-20〕。実際、こうした左派の封じ込めは、1952年の革命政権成立以来、米国の一貫した要求であり、パスにとってシレス政権下で減少し始めた米国からの援助を再び拡大して経済発展路線を強力に推進するために不可欠な政策であった。

一方で、パスは、こうした国内での左派締め付けに向かいながら、外交的にはソ連や東側陣営からの働きかけを巧みに利用した。パスは、既に触れたソ連との議員交流の実現にも見られるように、就任直後からソ連東欧諸国との外交関係の強化やソ連の錫精錬施設建設提案や経済援助の申し出に対して積極的に検討する姿勢を示し、米側の懸念を高めていた〔Desp 247 from LP to DS: “Weeka No. 45 (Czech and Polish activities),” November 8, 1960, NA724.00(W)/11-860; Desp 254 from LP to DS: “Joint Weeka No. 46,” November 15, 1960, NA724.00(W)/11-1560; Desp 335 from LP to DS: “Weeka No. 52,” December 27, 1960, NA724.00(W)/12-2760〕。またパスは、インドネシア等の非同盟諸国との連携も模索し、外交的にも米国への過度の依存を見直す姿勢を示していた。但し、リーマンによれば、パスは、「国内的考慮もあってパトロンを乗り換えることを決して真剣に考えたことはなかった」〔Lehman 1999: 133-136〕とされ、パスは長年米国と向き合ってきた経験から、グアテマラのように米国の決定的な不信を買うことなく、国内の左派の圧力や一定の自立志向を示すことによって米国のより大きな支援を引き出すすべをよく理解していたとも言えよう。

こうしたパスの経済成長戦略にとって、経済面のみならず、国内政治的にも対米関係の上からも鍵となるのが国有化鉱山での経営の主導権回復と運営の効率化実現であった。ボリビアの国有化鉱山においても、1952年の国有化以来、政府と組織労働との「共同統治」が続けられ、レチン指導下の「ボリビア鉱山労働者組合連合（Federación Sindical de Trabajadores Mineros de Bolivia : FSTMB）」が事実上 COMIBOL の経営の決定権を握っており、その下で巨額の赤字が続いて政府の財政にとって深刻な負担になっていた。これは、それまで3大錫資本によって吸い取られていた利益を革命政権の重要な担い手である鉱山労働者が自らに取り戻し分配するという意味で、ボリビアの革命政治の文脈ではごく自然の結果とも言えたが、ボリビア国民経済の発展をめざす MNR 政権指導部およびそれを支える米国の視点からは、経済的には放置できない事態であった。実際、1956年の経済安定化政策の開始以来、米国の強い圧力の下で、シレス政権は繰り返し経営の主導権の回復とそれによる余剰人員問題および購買部問題の解決を目指してきたが、常に妥協を余儀なくされてきた。当時、この問題に直接かかわっていた米国の専門家であるゾンダグによれば、こうした状況は、ボリビア経済の屋台骨ともいえる国有化鉱山の「劣化」を招いており、本来、既存の施設等の維持だけでも年間 600～800 万ドルの予算が必要なところ、その半分以下の投資しかなされず、国有化鉱山の持続的な運営が危ぶまれる事態となっていた〔Zondag 1966: 92; Thorn 1970: 192-94〕。1940年代以来、ボリビアの開発問題に一貫して携わり、問題を熟知していたパスは、東部に広がるサンタクルスを中心とする広大な低地帯の石油開発と輸出向け農業開発に将来のボリビア経済の発展を託していたが、国有化鉱山の問題は政治的にも経済的にも放置できない状況に至っていた〔Thorn 1971: 175, 192-94〕。まさにこうした状況の中で、パス新政権は、トライアングラー計画による COMIBOL 再生を目指し、新たに成立したケネディ政権と「進歩のための同盟」に期待し、政権の命運をかけることになるのである。

#### 4. 近代化論・「進歩のための同盟」

1961年1月のケネディ民主党政権の登場は、若く活力に溢れる大統領と「ベスト・アンド・ブライテスト」とも称された同じく若く優秀な政権スタッフの下で次々と新たな政策が打ち出される中で、高齢で積極的政策イニシアチブに欠けると見なされていたアイゼンハワー大統領指導下の共和党政権との対比で、米国民に新たな時代の始まりを印象付けた<sup>10)</sup>。外交に関しても同様の傾向が見られ、反共主義と保守主義に縛られたアイゼンハワー政権の下で、新興独立国や世界の進歩的勢力からの支持を米国が失っているとケネディ自身を含みリベラル陣営からの批判が高まる中で、ケネディ政権が「ニュー・フロンティア」外交によってラテンアメリカに対する「進歩のための同盟」の開始、第三世界全体への開発援助の拡大、平和部隊の創設等のリベラルな政策イニシアチブを打ち出し、そうした流れを大きく反転させたと国民に印象付けた。研究者によるケネディ外交の評価に関しても国民による評価と同様の傾向が見られ、当初、リベラルな立場からの対外政策の革新という同時代の見方を反映する解釈が中心であった。そうしたリベラル派の解釈の嚆矢となったのが、自身著名な歴史家であり、ケネディ政権に大統領補佐官の一人として参加したアーサー・シュレジンジャー2世のケネディ暗殺直後の著作〔シュレジンジャー 1963〕であり、その後の一般国民および研究者のケネディ・イメージ形成に大きな影響を与えた〔Rabe 2014: 139〕。その後、ケネディ期の政府文書の公開に伴い、ケネディ外交の限界やその反共主義の持つ問題点等も明らかにするよりバランスの取れた研究が現れてきている<sup>11)</sup>。前節で触れたケネディ政権のラテンアメリカ政策および「進歩のための同盟」をめぐる研究に関しても、上記のケネディ外交全般におけるリベラル色の強い解釈からよりバランスの取れた解釈への変化という同様の傾向が見られる<sup>12)</sup>。

こうしたアイゼンハワー外交からケネディ外交への移行をめぐる研究史の文脈を踏まえて、「進歩のための同盟」の内容について単純化を恐れずに簡単にまとめるならば、以下のようなだろう。即ち、既に触れたように、アイゼンハワー政権末期の開発援助と社会発展重視への政策転換を土台

10) アイゼンハワー外交に関しては、1980年代以降「アイゼンハワー修正主義」とも呼ばれる再評価が進み、新たに公開された政府の内部文書等の詳細な研究に基づいて、外交をジョン・フォスター・ダレス国務長官に任せ、指導力を発揮しようとしなかったという従来のイメージが大きく修正され、危機管理にたけ、自ら積極的に外交の指導力を発揮した政治家としてのアイゼンハワー像が定着し、その後の民主党政権と異なってベトナム戦争等の対外戦争への介入を避けた賢明な指導者という再評価が行われている。詳しくは、〔Rabe 1995〕を参照。こうしたアイゼンハワー再評価とまさに対をなすように、ケネディ政権に関しては、以下に見るようにより批判的な研究が多くなっている。

11) シュレジンジャーに続いて、リベラル派の視点からケネディの外交に焦点を当てたのが、ケネディ政権で国務省高官であったロジャー・ヒルズマンによって書かれたケネディ外交の本格的研究であった〔ヒルズマン 1968〕。外交文書の詳細な分析に基づくケネディ外交に関するよりバランスの取れたその後の研究としては、〔Patterson 1989; Giglio 1991〕を参照。

12) 例えば当初のゴードンらの「進歩のための同盟」の画期的性格を強調する研究〔Gordon 1963〕に対して、レビンソンとデオニスは、同政策の理想主義的目標を高く評価する一方で、実際にはラテンアメリカ各国においていかに当初の壮大な目標に届かなかったかを裏付けている〔Levinson and de Onis 1970〕。近年の最も本格的研究を著したタフエトは、単なる理想主義にとどまらない同政策の複雑かつ多面的な政策についていくつかの事例研究から明らかにしている〔Taffet 2007〕。



として、ケネディ政権は、ラテンアメリカにおいて「第二のキューバ」を避け、より効果的で長期的な反共主義の実現のため、民主化と社会改革に重点を置き、国内治安対策への支援も含めて大規模な援助計画を押し進めたのである。ケネディ政権は、W. W. ロストウら「近代化論」の主導者のイニシアチブに基づき、反共主義の観点から第三世界諸国における経済発展の重要性に注目し、前近代的な伝統的社会構造の変革と大規模な公的援助によって経済の「離陸」と「近代化」を促し、民主主義と市場経済型発展の担い手とされた中間層の育成と拡大によって、「キューバ・モデル」のような暴力的かつつ連とも結びついた変革の道に対抗して、アメリカ的な自由民主主義と市場経済の枠組みの中で「平和的革命」の実現をめざした。そして、ラテンアメリカ各国政府に対しては、対等なパートナーシップの下で「同盟」政策による大規模な公的援助とひきかえに、民主化と社会改革の推進を求めたのである [Latham 1998: 199-229; Smith 1994: 213-16]<sup>13)</sup>。ケネディ政権は、ボリビアに対する援助もこうした観点から見直しを行い、アイゼンハワー政権末期に尻すばみになっていた経済援助を大幅に拡大し、開発援助の強化が図られ、それまでタブーであった国有化鉱山への援助資金の投入も開始された。多くの開発途上国で「今後繰り返される革命を経験」していたボリビアは、反共主義の観点から MNR 政権が「最も害の少ない選択肢」という従来の後ろ向きの評価に代わって、「進歩のための同盟」がめざしたラテンアメリカ社会の改革モデルの一つとして評価し直されたのである [Letter from Bowles to JFK, July 6, 1961, Bolivia, General, 1961, Countries Series, Box 10, NSF Files, John F. Kennedy Library (以下 JFKL と略); Malloy 1970: 291]。

ボリビアにおける「進歩のための同盟」政策の実践について具体的分析に入る前に、もう 1 点、同政策の研究史上の論争点について触れておく。「進歩のための同盟」政策は、しばしば「進歩的な(賢明な)反共主義(enlightened anti-Communism)」とも評されるが、この点に関しては、アイゼンハワー期からケネディ期にかけてのラテンアメリカ政策の第一人者であるスティーブン・レイブによって疑問が呈されている。即ち 1961 年から 63 年にかけてのラテンアメリカに対するケネディ政権の政策を詳細に検討すれば、ケネディのレトリックと実際の決定や政策とを区別する必要があり、「政権の外交的承認をめぐる政策、国内治安対策、そして軍事・経済援助プログラムからは、ケネディ政権が反民主的で、保守的、そしてしばしば強権的な政権を支援したことが明らかであり、長期的な政治的・社会的民主主義の犠牲の下に [ラテンアメリカの] 反共的エリートが提供する短期的な安全保障が確保された」としている [Rabe 1989: 122]。「進歩のための同盟」に関しては、既に検討したその起源についてのアイゼンハワー政権との連続性と断絶をめぐる論争があるだけでなく、その政策としての内容や政策の結果についてどう評価するか、という点についても解釈の相違があるのである。レイブの指摘は、既に触れた点とも関連するが、近年の研究によって、「進歩のための同盟」政策がそのリベラルなレトリックの背後に持つ政策の実態や限界が明らかになってきたことを示すものである。

更にこの点に関して、米国とボリビア革命に関する最新の本格的な研究であるトマス・フィールドの著作は、ケネディ政権のボリビア援助政策に焦点を当てて、「進歩のための同盟」政策が持つ「負の」側面を強調している。即ちフィールドの議論によれば、本稿の以下の分析の重要な論点とも関わるが、パス政権が労働左派を中心とする国内での反対の高まりに対して、米国の治安対策援助に基づいて反対派への強権的な弾圧を強めていき、最後は革命政権の軍への依存と軍事クーデタへとつながっていくとされる。これは「リベラル」な「進歩のための同盟」がいわばボリビア国内の厳

13) ロストウによる「近代化論」とケネディ政権におけるその実践に関しては、[Pearce 2001] を参照。

しい政治的対立の中で「歪んだ」展開を見せた例外的な事例ではなく、むしろ反共主義のための開発をめざした同政策が内包していた「権威主義的发展 (authoritarian development)」という論理の当然の帰結であった、とフィールドは結論付けている。これは、「進歩のための同盟」、ひいてはケネディ外交、更には 1952 年ボリビア革命自体とパス政権の意味と性格をどうとらえるかという重要な論点と関わっており、以下、ケネディ政権のパス政権に対する援助政策の分析の中で検討していく重要な課題でもある。

本稿での分析はひとまずここまでとし、以下、次稿においては、ケネディ政権のボリビア革命政権援助の象徴ともいえるトライアングラー計画をめぐる両国の関係の展開を検討した後、パス政権と組織労働を中心とする反政府勢力との対立の激化とケネディ政権による治安対策援助の強化について分析し、次に両国関係の一つのピークとしてのパス大統領による 1963 年 10 月の初の米国公式訪問とその直後のケネディ暗殺による対ボリビア関係への影響について検証し、最後に米国によるボリビア革命政権援助の歴史の中におけるケネディ政権の位置づけや政策の意味、更にはケネディの対外政策、特に第三世界政策、ラテンアメリカ政策において対ボリビア政策が持つ意味、そして「進歩のための同盟」政策自体の意味についても検討し、結論とする。

(以下、(下)に続く)

## 文献リスト

### I. 一次資料

#### 【英文】

- Andrade, Victor, 1976 *My Missions for Revolutionary Bolivia, 1944–1962*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Dwight D. Eisenhower Library (DDEL と略), Ann Whitman File (AW と略)..
- Eisenhower, Milton, 1963 *The Wine Is Bitter: The United States and Latin America*, Garden City, NY: Doubleday.
- Ferrell, Robert H., ed., 1981 *Eisenhower Diaries*, New York: W.W. Norton.
- John F. Kennedy Library (JFKL と略), National Security Files (NSF と略).
- U.S. National Archives, Records of the Department of State, RG56 (NA と略).
- U.S. Department of State, 1983 *Foreign Relations of the United States, 1952–1954*, Volume IV: *The American Republics* Washington: Government Printing Office (FRUS, 1952–54, IV と略).
- U.S. Department of State, 1987 *Foreign Relations of the United States, 1955–1957*, Volume VII: *The American Republics*, Washington, D.C.: Government Printing Office (FRUS, 1955–57, VII と略).
- U.S. Department of State, 1991 *Foreign Relations of the United States, 1958–1960*, Volume V: *The American Republics, Microfiche Supplement*, Washington, D.C.: Government Printing Office (FRUS, 1958–60, V, Microfiche Supplement と略).
- U.S. Department of State, 1996 *Foreign Relations of the United States, 1961–1963*, Volume XII: *The American Republics*, Washington, D.C.: Government Printing Office (FRUS, 1961–63, XII と略).

#### 【スペイン語】

- Bolivia, Ministerio de Relaciones Exteriores y Culto, Recuerdo, Archivo Central (BMREC と略).
- Bolivia, Ministerio de Exterior y Culto, 1953 “Plan de diversificación de la producción,” *Boletín*, 26–27 (enero-diciembre 1953): 140–67.
- Guevara Arze, Walter, 1955 *Plan inmediato de política económica del gobierno de la revolución nacional*, La Paz: Bolivia, Ministerio de Relaciones Exteriores y Culto, 1955).
- Paz Estenssoro, Víctor, 1955 *Discursos parlamentarios*, La Paz: Editorial Canata.

## 【インタビュー】

Bennett, W. Tapley, Jr. in Washington, D.C. on December 15, 1989

Guevara Arze, Walter, in La Paz on January 23, 1990.

Holt, Pat, in Bethesda, Maryland on November 7, 1989.

Woodward, Robert, in Washington, D.C. on October 10, 1989.

## II. 二次資料

## 【英文】

Alexander, Robert J., 1958 *The Bolivian National Revolution*, New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Benjamin, Jules R., 1990 *The United States and the Origins of the Cuban Revolution: An Empire of Liberty in an Age of National Liberation*, Princeton, NJ: Princeton University Press.

Blasier, Cole, 1976 *The Hovering Giant: U.S. Responses to Revolutionary Change in Latin America*, Pittsburgh: University of Pittsburgh.

Blasier, Cole, 1983 *The Giant's Rival: The USSR in Latin America*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

Blasier, Cole, 1993 "The End of the Soviet-Cuban Partnership," in Carmelo Mesa-Lago, ed., *Cuba After the Cold War*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press: 59–97.

Brands, Hal, 2010 *Latin America's Cold War*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

Clawson, Robert W., ed., 1986 *East-West Rivalry in the Third World: Security Issues and Regional Perspectives*, Wilmington, DE: Scholarly Resources, Inc.

Conaghan, Catherine M., and James M. Malloy, 1994 *Unsettling Statecraft: Democracy and Neoliberalism in the Central Andes*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

Dawely, Alan, 1991 *Struggles for Justice: Social Responsibility and the Liberal State*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

Dozer, Donald M., 1959 *Are We Good Neighbors?: Three Decades of Inter-American Relations*, Gainesville, FL: University of Florida Press.

Dunkerley, James, 1984 *Rebellion in the Veins: Political Struggle in Bolivia, 1952–1982*, London: Verso.

Eder, George Jackson, 1968 *Inflation and Development in Latin America: A Case History of Inflation and Stabilization in Bolivia*, Ann Arbor, MI: Graduate School of Business Administration, University of Michigan.

Fine, Sidney, 1964 *Laissez Faire and the General-Welfare State*, Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press.

Field, Thomas C., Jr., 2014 *From Development to Dictatorship: Bolivia and the Alliance for Progress in the Kennedy Era*, Ithaca: Cornell University Press.

Foxley, Alejandro, 1983 *Latin American Experiments in Neoconservative Economics*, Berkeley: University of California Press.

Gill, Lesley, 2004 *The School of the Americas: Military Training and Political Violence in the Americas*, Durham: Duke University Press.

Gonzalez, Edward, 1987 "Cuba, the Third World, and the Soviet Union," in Andrzej Korbonski and Francis Fukuyama, eds., *The Soviet Union and the Third World: The Last Three Decades*, Ithaca: Cornell University Press: 123–147.

Gordon, Lincoln, 1963 *New Deal for Latin America: The Alliance for Progress* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Haslam, Jonathan, 2011 *Russia's Cold War: From the October Revolution to the Fall of the Wall*, New Haven: Yale University Press.

Horowitz, Irving L., 1988 *Cuban Communism*, 6th ed., New Brunswick, NJ: Transaction Books.

Immerman, Richard, 1982 *The CIA in Guatemala: The Foreign Policy of Intervention*, Austin: University of Texas Press.

Kahler, Miles, 1992 "The United States and the International Monetary Fund: Declining Influence or Declining Interest?" in Margaret P. Karns and Karen A. Mingst, eds., *The United States and Multilateral Institutions: Patterns of Changing*

- Instrumentality and Influence*, London: Routledge: 91–114.
- Kaufmann, Burton I., 1978 “The United States Response to the Soviet Economic Offensive of the 1950s,” *Diplomatic History* 2–2: 153–65.
- Kaufman, Burton I., 1982 *Trade and Aid: Eisenhower's Foreign Economic Policy, 1953–1961*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Klein, Herbert S., 1969 *Parties and Political Change in Bolivia, 1880–1952*, New York: Cambridge University Press.
- Klein, Herbert S., 1982 *Bolivia: The Evolution of a Multi-Ethnic Society*, New York: Oxford University Press.
- Klein, Herbert S., 2003 *A Concise History of Bolivia*, New York: Cambridge University Press.
- Kolko, Gabriel, 1988 *Confronting the Third World: United States Foreign Policy, 1945–1980*, New York: Pantheon.
- Korbonski, Andrzej, and Francis Fukuyama, eds., 1987 *The Soviet Union and the Third World: The Last Three Decades*, Ithaca: Cornell University Press.
- Krasner, Stephen D., 1985 *Structural Conflict: The Third World Against Global Liberalism*, Berkeley: University of California Press.
- Lathan, Michael, 1998 “Ideology, Social Science, and Destiny: Modernization and the Kennedy-Era Alliance for Progress,” *Diplomatic History* 22–2: 199–229.
- Latham, Michael, 2000 *Modernization as Ideology: American Social Science and “Nation Building” in the Kennedy Era*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Latham, Michael, 2011 *The Right Kind of Revolution: Modernization, Development and U.S. Foreign Policy from the Cold War to the Present*, Ithaca: Cornell University Press.
- Lehman, Kenneth Duane, 1999 *Bolivia and the United States: A Limited Partnership*, Athens, GA: University of Georgia Press.
- Malloy, James, 1970 *Bolivia: The Uncompleted Revolution*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- McMahon, Robert J., 2014 *The Cold War in the Third World*, Oxford: Oxford University Press.
- Mesa-Lago, Carmelo, ed., 1993 *Cuba After the Cold War*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Morley, Morris H., 1987 *Imperial State and Revolution: The United States and Cuba, 1952–1986*, New York: Cambridge University Press.
- Packenham, Robert A., 1973 *Liberal America and the Third World: Political Development Ideas in Foreign Aid and Social Sciences*, Princeton: Princeton University Press.
- Packenham, Robert A., 1988 “Cuba and the USSR since 1959: What Kind of Dependency?” in Irving L. Horowitz, ed., *Cuban Communism*, 6th ed., New Brunswick, NJ: Transaction Books: 109–139.
- Patterson, Thomas G., ed., 1989 *Kennedy's Quest for Victory: American Foreign Policy, 1961–1963*, New York: Oxford University Press.
- Patterson, Thomas G., 1994 *Contesting Castro: The United States and the Triumph of the Cuban Revolution*, New York: Oxford University Press.
- Pearce, Kimber C., 2001 *Rostow, Kennedy, and the Rhetoric of Foreign Aid*, East Lansing, MI: Michigan State University Press.
- Rabe, Stephen, 1988 *Eisenhower and Latin America: The Foreign Policy of Anticommunism*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Rabe, Stephen, 1989 “Controlling Revolutions: Latin America, the Alliance for Progress, and Cold War Anti-Communism,” in Patterson, ed., *Kennedy's Quest for Victory*: 105–122.
- Rabe, Stephen, 1995 “Eisenhower Revisionism: The Scholarly Debate,” in Michael J. Hogan, ed., *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations since 1941*, New York: Cambridge University Press: 300–325.
- Rabe, Stephen, 1999 *The Most Dangerous Are in the World: John F. Kennedy Confronts Communist Revolution in Latin America*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.



- Rabe, Stephen, 2014 "Cold War Presidents: Dwight D. Eisenhower, John F. Kennedy, Lyndon Baines Johnson, and Richard M. Nixon," in Frank Costigliola and Michael J. Hogan, eds., *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations since 1941*, 2nd ed., New York: Cambridge University Press: 131–166.
- Schlesinger, Stephen, and Stephen Kinzer 1982 *Bitter Fruit: The Untold Story of the American Coup in Guatemala*, Garden City, NY: Doubleday.
- Siekmeier, James F., 1999 *Aid, Nationalism and Inter-American Relations, Guatemala, Bolivia and the United States 1945–1961*, Lewiston, NY: Edwin Mellen Press.
- Siekmeier, James F., 2011 *The Bolivian Revolution and the United States, 1952 to the Present*, University Park, PA: Penn State University Press.
- Sigmund, Paul E., 1980 *Multinationals in Latin America: The Politics of Nationalization*, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Smith, Peter, 1996 *Talons of the Eagle: Dynamics of U.S.-Latin American Relations*, New York: Oxford University Press.
- Smith, Robert F., 1960 *The United States and Cuba: Business and Diplomacy, 1917–1960*, New York: Bookman Associates.
- Smith, Tony, 1994 *America's Mission: The United States and the Worldwide Struggle for Democracy in the Twentieth Century*, Princeton: Princeton University Press.
- Smith, Wayne, 1987 *The Closest of Enemies: A Personal and Diplomatic Account of U.S.-Cuban Relations since 1957*, New York: W.W. Norton.
- Szulc, Tad, 1986 *Fidel: A Critical Portrait*, New York: Avon Books.
- Taffet, Jeffrey, 2007 *Foreign Aid as Foreign Policy: The Alliance for Progress in Latin America*, New York: Routledge.
- Thorn, Richard B., 1971 "The Economic Transformation" in James Malloy and Richard Thorn, eds., *Beyond the Revolution*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press: 157–216.
- Toranzo Oroca, Carlos, 2008 "Let the Mestizos Stand Up and Be Counted," in John Crabtree and Laurence Whitehead, eds., *Unresolved Tensions: Bolivia Past and Present*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press: 35–50.
- Welch, Richard, 1985 *Response to Revolution: The United States and the Cuban Revolution, 1959–1960*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Westad, Odd Arne, 2007 *The Global Cold War: Third World Interventions and the Making of Our Times*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Whitehead, Laurence, "The Bolivian National Revolution: A Twenty-First Century Perspective," in Merilee Grindle and Pilar Domingo, eds., *Proclaiming Revolution: Bolivia in Comparative Perspective*, Cambridge, MA: Harvard University Press: 25–53.
- Wilkie, James, 1969 *The Bolivian Revolution and U.S. Aid since 1952*, Los Angeles: UCLA Latin American Center.
- Wood, Bryce, 1961 *The Making of the Good Neighbor Policy*, New York: Columbia University Press.
- Wood, Bryce, 1985 *The Dismantling of the Good Neighbor Policy*, Austin: University of Texas Press.
- Young, Kevin, 2013 "Purging the Forces of Darkness: The United States, Monetary Stabilization, and the Containment of the Bolivian Revolution," *Diplomatic History* 37–3: 509–557.
- Zondag, Cornelius, 1966 *The Bolivian Economy, 1952–65: The Revolution and Its Aftermath*, New York: Praeger.
- Zoumaras, Thomas, 1987 "Eisenhower's Foreign Economic Policy: The Case of Latin America," in Richard A. Melanson and David Mayers, eds. *Reevaluating Eisenhower: American Foreign Policy in the Fifties*, Urbana: University of Illinois Press: 155–191.

# 【邦文】

- 上村直樹 2015a 「アイゼンハワー政権の対ラテンアメリカ援助政策とボリビア革命-MNR 革命政権への初期の対応をめぐって（1953 年 1 月～5 月）」『アカデミア』（社会科学編）第 8 号：1–25.
- 上村直樹 2015b 「アイゼンハワー政権によるボリビア革命政権への援助決定：ミルトン・アイゼンハワーの役割と南米視察旅行（1953 年 6 月～7 月）を中心に」『アカデミア』（社会科学編）第 9 号：1–26.

上村直樹 2016a「アイゼンハワー政権によるボリビア革命政権への長期的援助の決定：米政府内および両国政府間の最後の攻防（1953年9月～1955年12月）」『アカデミア』（社会科学編）第11号：25-49.

上村直樹 2016b「アイゼンハワー政権による経済安定化政策とボリビア革命政権：軍再建と軍事援助への道，1956-60年」『アカデミア』（社会科学編）第11号：13-34.

佐々木毅 1993『アメリカの保守とリベラル』講談社.

シュレジンガー，A.M. 1966『ケネディー栄光と苦悩の一千日』（上）・（下）（中谷健一訳）河出書房.

ヒルズマン，ロジャー 1968『ケネディ外交』（上）・（下）（浅野輔訳）サイマル出版会.

松岡完 2013『ケネディとベトナム戦争-反乱鎮圧戦略の挫折』錦正社.

李鐘元 1996『東アジア冷戦と韓米日関係』東京大学出版会.

#### 【スペイン語】

Cajías, Lupe, 1989 *Historia de una leyenda: Vida y palabra de Juan Lechín Oquendo, líder de los mineros bolivianos*, segunda edición, La Paz: Ediciones Gráficas “EG” .

Echazu Alvarado, Jorge, 1988 *El militarismo Boliviano*, La Paz: Ediciones Liberación.

Frontaura Argandoña, Manuel, 1974 *La Revolución Boliviana (La Revolución Nacional)*, La Paz: Editorial “Los Amigos del Libro” .

Guzman, Augusto, 1981 *Historia de Bolivia*, sexta edición, Cochabamba-La Paz: Editorial “Los Amigos del Libro” .

Navia Ribera, Carlos, 1984 *Los Estados Unidos y la Revolución Nacional: entre el pragmatismo y el sometimiento*, Cochabamba: Centro de Información y Documentación.

# The Kennedy Administration and Bolivia's MNR Revolutionary Government: Bolivia as a “Model” for the Alliance for Progress, 1961–1963 (Part I)

Naoki KAMIMURA

## 要 旨

米国は、1953年にボリビア革命政権に対する経済援助を決定し、その後、歴代政権の下で、1964年に革命政権が軍事クーデタによって倒れるまで大規模な経済援助が続けられる。本稿は、米国による革命政権への援助という特異ともいえる政策の背景と意味を解明するための一環として、アイゼンハワー政権の援助政策を引き継いだケネディ政権に焦点を当てる。ケネディ政権は、キューバ革命の成功とカストロ政権の対ソ接近の衝撃の中で、「進歩のための同盟」によってラテンアメリカに対する大規模な援助と改革に乗り出し、ボリビア革命をその政策の一つのモデルと位置付けるとともに、アイゼンハワー政権末期に一旦減少に向かった経済援助を再び拡大し、ボリビア革命政権のテコ入れを図る。本稿は、こうしたケネディ政権による政策の意味を対ボリビア革命援助政策全体の展開の中で検討する。